

パプアニューギニア低地住民における過去 30 年間の人口変動

Population Growth for the past 30 years in Lowland Papua New Guinea

萩原 潤 (宮城大学)

Jun Hagihara (MIYAGI University)

hagi@myu.ac.jp

地域研究において、研究対象となる地域に居住する集団の様々な特性を把握することはその後の研究を行う上で基本的な情報となる。それらはセンサスあるいは家系図調査などによって得られ、それら情報をまとめ対象集団の規模や出生や死亡、そして婚姻などの状態を把握することが可能であるばかりでなく、長期的な観察によって人口増加率や移住の推定が可能となる。

家系図データは人口学的な側面ばかりでなく、他の分野においても重要な資料となる。社会・文化人類学、人類生態学などの分野では親族関係からみた社会的ネットワークの理解や、それを維持するための仕組みである婚姻、相続に関するルールを模索する上で重要である。伝統的な社会では複雑な婚姻規制がみられるが、その一方でそれら人口 100 人程度の集団で厳密に守った場合には適切な配偶者が見つからないケースが少なからず発生するという報告があり、社会で認識されている婚姻に関するルールと、実際の運用には乖離の存在が示唆される。そのようなルールがどのように運用しているのかを知るために家系図によるデータが有用である。

地域の人口やその構造を知ることが、今後の地域にあり方を考え、介入するための応用領域に関わる学問分野でも有効である。交通インフラの形成やコミュニティビジネスの展開、あるいは地域交流の促進といった地域政策に関する諸課題に取り組む上で地域の人口や年齢構造、あるいは人口の移入、移出に関する情報は不可欠である。

健康と疾患に関わる分野でも家系図による情報が必要とされることがある。ある疾患に家族集積性があるかどうか、また家族集積性が認められた場合、それが遺伝的要因によるものであるのか、環境要因によるものなのか、それらの可能性を検討する上で家系図データによる親族関係の情報が有効に機能する。

上記のように家系図データによる情報が様々な分野で利用され、特に地域研究者は対象地域で最初に行う調査であるにもかかわらず、多くの場合でその調査時点での情報のみをまとめたものであることが多く、世代を超え継続的に追跡された調査はあまり見られない。本研究は過去に行われた世帯調査データをアップデートし、過去数十年にわたる家系図データを作成し、対象地域の人口の変動を考察することを目的とした。

パプアニューギニアオリオモ台地を中心に居住するギデラ語族の集団を対象にした調査は 1980 年代より本格的に行われ、その後も断続的に調査が行われてきた。本研究ではこれまでに得られたデータにと 2012 年以降に行われた世帯調査のデータを結合し、過去 30 年間の家族の変遷を追跡可能なデータベース化を試みた。データベース化により今後のさらなるデータの積み重ねや、修正が容易になることに加え、現象から集団内にある何らかの法則を見いだす可能性があることが期待された。その上で、対象地域の人口の変化を考察した。